

# 第1回芸術文化振興ビジョン検討委員会 議事要旨

平成26年7月14日(月)15:00～17:00  
兵庫県民会館7階「亀の間」

## 1 開会

## 2 開会挨拶

平野知事公室長が挨拶を行い、芸術文化振興ビジョン改定に向けた審議を依頼した。

## 3 委員紹介

## 4 委員長選出

委員の互選により、新野幸次郎委員（神戸大学名誉教授）を委員長に選出。新野委員長が、委員長就任にあたり挨拶を行った。

## 5 資料説明

協議に先立ち、芸術文化振興ビジョン改定の概要、背景、現行ビジョンの検証・評価と今後の方向性について、資料に基づき事務局が説明を行った。

## 6 協議

兵庫県の取組の中で評価の低いものがいくつかあった。現実を切り離れた部分ではうまくいっているが、生活の中に密着してできているのかが大きな課題である。それをどう改定ビジョンの中に取り入れていくのかが大きな柱になると思う。支援の方法として、お金だけではなく、場づくりやきっかけづくりをいれていくということを考えなければならない。

新たな課題について、「若年者」「高齢者」と別々ではなく、一緒になれる場、共に支えていく場という新しい切り口が必要ではないか。

若いお母さんにむけて0～3歳の子ども達が出会うコンサートや人形劇をやっているが、お母さん達が子どもと一緒に体験するということは、ただ芸術文化を共有するだけでなく、心置きなく楽しく子育てするということにつながっている。この事業はもっと広げていきたいが、若い人達が参加するのでチケット代を高くできず、地域の文化団体も苦慮しており、助成金を取りながらやっている。

病院に長期入院している子どもたちに芸術文化の鑑賞機会を与えるための出張公演を行っている。年に1回でも子どもに本物の芸術を、と考えプロを派遣したいが、県の方からも予算がないと言われ、助成金を確保しながら何とか取り組んでいる。芸術文化の大切さは病気の子どもたちも同じである。

芸術文化の振興に関わる県内全ての取組を一度に、効率よく調べられる手段がない。現在の情報発信の仕方や統括の仕方について再考する必要がある。例えば「スポーツクラブ21ひょうご」のように、兵庫県の芸術文化の振興を統括する縦の部署や団体を設けて、行政も横軸を大切にしたい事業を行ってほしい。また、振興ビジョンの事業体系の全容がわかるHPの運用、情報発信、HPを訪れた人が、目的に応じて知りたい情報を容易に検索できる仕組みづくり、登録制度などボランティアをする人とそれを必要とする場とのマッチングのための仕組みづくり、施設の空きスペースの情報発信、芸術工芸品や作家の作品をひょうごブランドとして販売促進、各市町が作成する情報とのリンク、フェイスブックなどSNSとのリンクなど、様々な活用が考えられる。県内外、国内外への情報発信力の強化、ICTの活用は様々な目的を達成させる大きな役割を担ってくれる。

ビジョン作成のための大切なポイントは3つある。本物に触れ、本物から学ぶ教育。イベントや体験授業はひょうご教育創造プランにも書かれているが、カリキュラムやクラブ活動にも踏み込んだプランも策定しても良いのではないかと。ふるさと意識を醸成する土台づくりでは、文化財や伝統芸能の保存継承と、それに必要な新たな発想での財源確保や新たな発想を加えた魅力ある伝統文化作品の創造も大切である。芸術文化を基盤とした参画と協働のまちづくりも大切である。

特に女性は幼少期からピアノ、絵画、バレエなど習い事という形で芸術文化に造詣が深い方も多いが、中学や高校から遠のいてしまい、大人になると、経済面等がハードルになって行けないということがあるのではないかと。これだけの施設があるので、習い事の延長線上でつながっていくという流れが必要である。但馬では、より本物に出会う機会が少ない。全県で何か特別な取組によってつなげてほしい。

伝統芸能・文化に関し、但馬では能や歌舞伎など小さい単位でかなりの数が取り組んでいる。それらを守っているのは高齢者と子どもである。熱心な指導者がいるところは今でも継続しており、素晴らしい価値があるものだということを子ども達にも認識させている。こういうことをぜひやってほしいという要望もある。全県的に何かよい方法がないか。

人が育つためには芸術は絶対に必要であるが、現行ビジョンはその押さえ方が弱い。生活そのものの中に、日頃から素敵な絵が目の触れる場所にある、本物の音を楽しむ環境があるなど、ヨーロッパ並みに進めていくべきである。

縦割り行政の中で芸術文化が縦に置かれているのは間違いである。兵庫県は横に置いてほしい。まちづくりなどどんな視点から入っても、人が育つ原点として、芸術文化を横軸においたビジョンを作してほしい。ビジョンの冒頭で、「人が育つためにこんなに大事なものは無い」ということを強調してもらいたい。

日本は文化に対する公的予算が多くないので、市民の志あるお金を集めてでも子どもたちに本物の音楽を届けようという取組をしている。淡路島では日常的にコンサートがたくさんあるわけではなく、まして子どもたちには機会が少ない。今学校の中でいろんな問題が起きているが、心の育ちが弱い。芸術が一番の薬になる。全ての子どもたちが小さい時に芸術に触れ、右脳が育つよう、本物に触れる機会を兵庫県が率先して提供してほしい。

寄付活動は、一人一人の意識の中に、「こういうモノにこそお金をかけないといけない」という市民を増やすことである。このような市民力を高める運動もビジョンの中にいれてもらいたい。

昨今の若者が芸術文化に関心がなくなってきているのではなく、音楽や美術が好きな人も多いと感じる。既存の団体の中に自然と入ってくる時代ではないので、若者が世代を超えて交流しあえる緩やかな仕掛け作りが必要である。

市町合併により郡部では複数の文化施設を持つこととなり、県下の市町は運営に苦慮している。郡部の施設を閉鎖すると、ますます公演や大会の実施場所がなくなり都市部に偏る。一方都市部では申し込みが集中し、抽選や利用料金が高いなどの問題点が生じる。利用しやすい施設の維持には国や県の支援が必要。施設側も、営利目的でも利用できるようにするなど要件緩和を図るなどの工夫が必要と考える。

丹波市の「シューベルティアードたんば」など地域を挙げて芸術文化を通じたまちの活性化を進めている取組は多数ある。県外でも香川県の直島など全国から観光客を集めている。このような成功事例を集めて県が広く公表することで地域が元気づけられ、交流人口を増やすきっかけになるのではないかと。

阪神淡路大震災・東日本大震災で人々を勇気づけたものは音楽、祭り、伝統芸能であった。阪神・淡路大震災では芸術文化が被災者の心を活性化させる重要なものだ実感した。芸術文化の社会でも高齢化が進んでいる。こうした中、神戸芸術文化会議でも、老人ホームなどへ支援に行っている。今まで素人が行くことが多かったので、プロが行くようになると大変喜ばれ、より活性化してきた。県でもこのようなアウトリーチ活動に取り組んでももらいたい。

最近若手があまりホールへ来ない。若い人にも機会を与えることが大切である。関西広域連合の古典の日ともあわせて、文化に対する意識を高めることが重要である。ふるさと意識の醸成という点から、例えば出石の永楽館など、もっとPRして行ってもらうように、ボランティアも一体になって取り組めるよう、支援すればよい。

学校教育では邦楽の先生が足りないと聞く。雅楽や謡曲などは衰退している。いけばなやお茶などもお稽古事をやらないので衰退している。兵庫県にも雅楽の会を作った。7月に神戸文化ホールでNHK学園の短歌祭が初めて開催される。このようなものをどんどん県で受け入れてやってほしい。

西宮の芸文センターと西宮市民は密着しておりすばらしい。大阪のシンフォニーホールには企業や財界の人が行っているが、神戸では財界・企業の人が見当たらない。以前財界の人と文化人との交流事業をやったことがあるが、このような交流が進めばよい。県が企業、財界の人にも関心をもってもらえるような取組を進めれば、活性化につながるのではないかと。

今は政治家も含めてなかなかビジョンを描かない。芸術文化振興ビジョンというものを出した以上は必ずやり遂げるという意識をぜひもってほしい。ビジョンに加えてハードワークも大切であり、何もしなければビジョンを作っても成功しない。ビジョンを掲げた以上は心を決めてやり遂げてほしい。

私は小学4年生、10歳が一番大事な歳だと考えている。10歳の時にぜひ子どもたちに美術館の絵やすばらしい音楽を見せる取組をやってほしい。4年生は何でも吸収できる歳である。4年生の担任にこそクリエイティブな先生を置いてほしい。

兵庫県は大きく、日本海から神戸に来るのは難しいので、県も国から予算を取って、もっと出前をやってほしい。但馬、丹波、淡路島でも本物の芸術に触れることができれば、兵庫県にもすばらしい感性を持った子どもたちが生まれる。

神戸は財界の人が来ないと言うことであったが、県立美術館では「みの会議 with ANDO」というのを始めた。サラリーマンにどうしても美術館へ来てほしいということで、年2、3回やっている。今、企業10社に会員になってもらい、社長さんも来て、若い人に美術館の大切さを教えている。これがだんだん根付いてきているので、神戸も変わってくると思う。

世界への発信という点では、ポンピドゥコレクションなどすばらしい展覧会ができた。今後もスイスの「フィルディナント・ホドラー」展等を開催するのでたくさんの人にきてほしい。8月5日からは、宝塚100年を記念して今までにない展覧会をする。宝塚は国劇に近い。兵庫が生んだこのすばらしい文化を世界に発信していかなければならない。

多可町では、芸文センターのわくわくオーケストラが始まった2年後から、「わくわくベルディ」を実施し、毎年小学4年生全員をホールに呼んでいる。郡部へ行くほどホールが地域の中で大きな役割を果たしている。ビジョンを読めば、抽象的であり、具体的ではない。芸術関係のお金が減っていく中で、ホールの必要性をどう地方の行財政の担当者に伝えていくかが大切である。抽象的な話をいかに自分たちの中に取り込んで活かしていくか、ということになると、行政と指導者、お金をかけたプロの指導者がいてこそ本物になる。

神戸元町ミュージックウィークは、神戸元町商店街連合会の会費が土台となり、阪神・淡路大震災をきっかけとして協議の上取り組んでおり、本年 17 回目を準備中である。震災都市神戸にあって、元町がご近所と一緒に元気な日常を取り戻し、お客様に喜んでいただける行事の展開を願って始めた音楽祭である。ストリートや界隈のホールに素敵な演奏で参加して下さる演奏家の方々、その演奏を求めて集まって下さるお客様であふれる、その喜びをお伝えしたくて、兵庫県をはじめとして、他府県から協賛広告をいただいた時期もあった。

この会議も 1 回程度は神戸以外で開催してはどうか。

姫路は歴史文化には事欠かず、官兵衛から姫路城の改築まで、お客様が多い。一方で姫路駅が改装されて立派になり、大きな広場ができたが、そこで若いミュージシャンや絵描きが活動を始めており、ここから若い人が登竜門として出ていってくれるのではという雰囲気があるのはいいこと。

スペシャリストをどう兵庫県から排出していくのかが大きな問題である。兵庫県出身の有名なアーティストをぜひ兵庫県に招き、子どもたちのコンサートなどで活躍する場を設けてほしい。樫本大進さんという赤穂出身のバイオリニストが「ル・ポン」という音楽祭を姫路と赤穂でやっていて、非常に評判が高い。もっと探せばこういうものに協力してくれる人もいるのではないか。それによって子どもたちの潜在意識も高まっていくと思うので、強化してほしい。

芸術家が地域や学校に出向くアウトリーチ事業をもっと進めてほしい。また、芸術文化を通じた世代間交流を促進してほしい。子どもたちが地域の芸術家の様々な芸術を「見る」「聞く」「触れあう」など高齢者との交流が大事だと思う。小・中・高それぞれの代でそういうものが必要である。但馬文化協会では、こちらから押しかける講師名簿を作った。無報酬で、来てくれと言われたらその人の時間があえば行くというもので活動が進んでいる。講師派遣の講師団名簿がいたるところで手に入る、見られるようになれば、各学校が学校単位でお願いできるようになる。ちょっと工夫して、県単位でできないか考えてほしい。

オリンピックは東京だけではない。関西、兵庫を中心に抜け駆けでもいいので、役に立つこと、芸術的な何かよいことを企画してビジョンに盛り込めば、関西、神戸、兵庫がにぎやかになると思う。

芸術文化振興ビジョンを読むと県民の意識が高く、施設も充実している。「観る」「聴く」割合は高いが、生で体験をするということが弱いと感じた。これからますます経済や ICT が発展していく中で、人間の持つ五感、匂いや触感、味わうなどの体験を充実させていくことが大切である。

伝統文化は先人が培ってきた生活が文化をつくり、芸術を生んだ。伝統芸能、文化と芸術文化とを切り離してきたところがあったが、もう少し全体的に捉え、人間が今まで培ってきた中で私たちの文化をつくってきたということも踏まえればよい。

子どもと学校教育が切り離せない。2002年から中学校で伝統音楽が取り入れられた。しかし多くの伝統文化・音楽が取り入れられるようになってきているにも関わらず、学校の方ではそれを子どもたちに教える、伝えられる内容が少ないと聞く。これから少子化が進む中で、子どもたちは学校と地域が生活範囲であることから、学校・地域が連携して取り組むことを考えていかなければならない。

健全者と障害者という部分が入り込んでいないのではないか。自分と他者とのつながり、コミュニケーションというものが芸術文化を考える上で必要なことではないか。

メセナや住民参加の促進に関して、例えばロックコップスというボランティアをすればコンサートのチケットが手に入るという取組がある。若者達のボランティア活動への取組として、兵庫県でもそのような取組があればよい。

東京オリンピックなど海外を視野に置く場合には、ますます日本に住む者という意識を持たなければならない。

先ほど小学校4年生（10歳）での芸術文化教育の重要性について話があったが、小学校3年生までは具体物を使って学習し、4年生ぐらいから算数、国語、その他の教科でも次第に抽象的な思考が入ってくる。そこで勉強が難しくなって躓く子もいれば、そこからぐっと伸びる子もいる。4年生はそういう境目の時であり、心の方も複雑な思いがわかるようになっていく年頃である。小学校の中には「2分の1成人式」という取組をしている学校もある。

学校教育が芸術文化の振興に果たす役割は大きい。県下の幼・小・中・高等学校では、外部から専門家を呼んでコンサートを開くなど、学校、園全体の取組として音楽の授業だけでなく様々な芸術活動に取り組んでいる。秀でたプロを養成するのが学校教育の目的ではないので、底辺を拓げる、子どもたちにできるだけ芸術文化に触れる機会を提供して、体験してもらうことが一番である。伝統文化の問題では、例えば音楽の授業で和楽器が取り入れられると、物は来るがそれを指導する人、ソフトがついてこず、逆に学校現場は苦しんでいることがよくある。そのあたりは考えなければならない。

兵庫県には地域の文化遺産、伝統文化も含めて多くのものがあり、学校教育でも色々と取り組んでいるが、一律に「これをしなさい、あれをしなさい」という押しつけはやめてほしい。学校現場の自由を確保していただいて、柔軟な行政の関わりをお願いしたい。

授業中に童話などの読み聞かせをすると子どもが喜び、騒がしい教室でも静かになる。そういう経験をした子どもがだんだん減っている。子守歌や童謡を国語で扱うがあまり知らない。芸術文化の振興を子どもたちの問題として捉えると、若い親をどう支援するかといった面も考えていかなければならない。

## 7 諸連絡

議事録の公開と次回の日程調整について、事務局から説明を行った。

## 8 閉会挨拶

平野知事公室長が、閉会挨拶を行い、今後のさらなる審議を依頼した。

## 9 閉会